C・M・S・の日本初期伝道

――忘れられた宣教師モンドレルの教育事業――

木村信一

序

キャノン・マックス・ウォレン博士が、その著「近代史に於ける英国よりの伝道運動」の終章に、次の結語を記している。「宣教師とは歴史の流れのうちに、自己を水没するものである。否、宣教師のみならず、近代史における全ての伝道運動もまた然りである。併しながら宣教師並びに伝道運動は、その全ての時間を捧げて歴史を創造したのであった。」[1] ここに紹介しようとするアーチデアコノ・モンドレル[2]師は、まさに斯くの如き宣教師であった。

モンドレル師は英国より来日した宣教師中の最古参者であり[3]、その伝道と教育に関しては高邁な識見を有し、これを長崎に、或は九州全土に実践したのであったが、これらの業績はすべて煙滅して、今や師の名を記憶する者も少ない。ことに師の業績中、特筆大書すべきものは、師の神学教育であるが、「日本聖公会百年史」すら長崎聖アンデレ神学校については僅かに一行半の記事であって、日本聖公会最古の神学校であり、且つ現在の聖公会神学院の前々身であったこと等にいては何らの記述がない。更にまた師が創立した出島英和学校、長崎女学校については一言半句の記事もない。これは勿論「百年史」編纂にあたって、資料として採用したものに、記録がなかったことと推察するが、まことに残念なことである。フルベッキ

師はその日本プロテスタント伝道史において「モンドレル師はそのマダガスカル伝道十年という長所を活かし、長崎伝道史に新しい時代を画した。且つ邦人伝道者養成については早くから注意を払った。[4]」と評している。プロテスタント各派の伝道は、長崎と横浜で始ったので、同師の来日以前に、少からぬ宣教師が長崎で伝道した。フルベッキ師が記すモンドレル師の伝道は新しい時代を画したというのは高い評価である。さらに英国においてもC・M・S[5]・本部刊行の「C・M・S・働き人の略伝」と題した書物があるが、この書物には世界のC・M・S・伝道に貢献のあった十五名の宣教師を選んで、その伝道事業を記録している。日本伝道に多くC・M・S・宣教師が送られたが、この書物にその名を列ねているのはモンドレル師ただ一人である。これによってみても師が故国イギリスに於て如何に高く評価されていることが解ると思う。

モンドレル師の邦人神学教育の構想は、フルベッキ師の指摘するごとく、長崎着任早々からのものであった。着崎の翌九年の秋からは特に選んだ数名の青年を、宣教師館の近くに下宿せしめ、連日集めて聖書教育を施し、加えてグードォル女史に英語を教授せしめている。筆者は青年たちを毎日集めて、聖書教育を実施した明治九年を、長崎聖アンデレ神学校の濫觴と考えたい。翌十年九月からは四名の学生をもって正式に長崎神学校を開校し、同年十一月聖徒アンデレ日に校舎が落成している。長崎聖アンデレ神学校の名称はこの聖徒に捧げたためである。さらに明治十二年には、英和学校と称された小学校とそれに併置した英語塾、裁縫塾を開き、同じく十二年にグードォル女史を校長とする長崎女学校も開設した。これを想うときに来日した英国宣教師中独力で神学校、女学校、小学校を開設し、これを経営した宣教師は、果して[6]他に何人があったであろうか。実に師は卓見、有能の士と言うべきである。本稿は師の教育業績に加えてその伝道業績を詳述すべきではあるが、紙数の関係上これを他の機会にゆずり、割愛せざるをえないことを遺憾とする。

〈注〉

(1) Max Warren : The Missonary Movement from Britain in Modern History. p. 180

(2) アーチデアコノの職制は、日本聖公会法憲法規にはかつて存在しなかった。しかし英国教会を始め、他のアングリカン・コンミュニオ

ンにおいては古くから制定され、主教代理として教区の行政権その他を管轄し、日本聖公会においてもそのミッション時代に、ミッション内部の職制として存在し、C・M・S・においてはモンドレル師が初代のアーチデアコノで、続いてワレン、プライス、ハッチンソン、バチラーの諸師がその職にあった。S・P・G・においては、ショー、キングの両師であった。

(3) わが国に最初に着任した宣教師はジ・エンソー師であるが、初期のC・M・S・宣教師を聖職按手順並びに宣教師登録順に記すと次の通りである。モンドレル師（一八六三年按手、登録番号六三九号）、ワレン師（一八六四年按手、登録六五五号）、パイパー師（一八六六年按手、登録六七九号）、エンソー師（一八六七年、七〇九号）、バーンサイド師（一八六九年、七二六号）、デニング師（一八六九年、七〇九号）、ハッチンソン師（一八六九年、七四四号）、ファイソン師（一八七一年、七七四号）、エビントン師（一八七四年、七八七号）、これをみてもモンドレル師は、聖職按手順でも宣教師としての登録順でも来日したC・M・S・宣教師のうち最古参であった。

(4) Tokyo Missionary Conference, 1900. 中の G.F. Verbeck: History of Protestant Missions in Japan. p. 784.

(5) C・M・Sは Church Missionary Society の略語である。二、三の日本訳があるが、筆者はC・M・S・そのまま採用したい。

(6) C・M・S・の日本伝道の拠点は、長崎、大阪、東京、函館であったが、大阪神学塾はワレン、エビントン両師によって始められ、女学校としてはオックスラッド女史の永生女学校、男子校は明治一七年開設当初の校長はポール師で、それぞれ責任の分担があった。函館においては明治二一年、アンデレス師によって靖和女学校が開かれ、また函館伝道学校も設置されたが、これは間もなくファイソン主教がその校長となり、婦人伝道師養成はミス・タプソン、東川診療所はコルバン博士とそれぞれの所管があった。

Ven. Herbert Maundrell.

1

ハーバード・モンドレル師の履歴に関する公的資料は C・M・S・本部刊行の宣教師登録簿、(Register of Missionaries) である。この登録簿の第六三九号に師の履歴が記載されている。これを引用すると次の通りである。

Maundrell, Herbert. — Age 23. of Calne, Wiltshire. 1860, at C.M. College. 1863, March 1, **D.**, by Archbishop of Canterbury; 1864, June 11, **P.**, by Bishop of Mauritius. 1863, April 18, to Madagascar —Vohimare. 1866, Andovoranto. 1871, transferred to Mauritius, on relin-

quishment of Madagascar Mission; 1873, Aug. 7, to England; 1875, May 6, transferred to Japan—Nagasaki; 1884, March 24, to England. 1886, Feb. 24, to Japan; 1890, Feb. 20, to England; 1886, Archdeacon of Japan. 1890, Archdeacon of Nagasaki and South Japan. 1893, retired on account of health. Translated the First Reading Book into Malagasy. Engaged in revising the Occasional Services of the Malagasy Prayer Book, and translating the Ordination Service into Malagasy. Translated Pinnock's Analysis of Old Testament History into Japanese; also Life of our Lord in Japanese. **M.** 1868, April 21, Eliza Hobbs (daughter of No. 286), who died at Nagasaki, Mar. 11, 1887; (2) July 21, 1891, Alice Pointer, who died at Winchester, Feb. 20, 1892.

以上がC・M・S・登録簿に記されている同師の履歴のすべてであるが、これを他の史料によって補いたい。E・ヘッドランド著『C・M・S・働き人の略伝[2]』の中に『アーチデアコノ・ハーバート・モンドレル師」と題した略伝がある。これは筆者が接した唯一の伝記である。この他に『西紀一九〇〇年東京宣教師会議[3]』と題した浩瀚な議事録があるが、その附録に在日宣教師中逝去した諸先輩の追悼欄があるが、その中でH・エビントン師がモンドレル師に追悼の辞を捧げている。さらに同師の日本布教伝道に関する史料は、同師がC・M・S・本部に送った書簡である。これは同本部古文書室に整理され保存されている。

モンドレル師は英国、ウィルトシャー、カルン村、サンズ（Sands）の出身で、幼少時代から勤勉で、勉強好きな少年であったが、貧しい農家の父親は、土地の学校を終了すると直ちに農業に従事せしめた。勉学精神に富んだこの少年は、常にラテン文法書をポケットに携帯し、畑で学習するのであった。さらに少年は、聖書を良く学び主の跡をふむことを努め、友人を教会に導き、聖書読習のグループを造り、将来、異境の伝道者として活躍する素質は、その少年時代から発揮されていた。師がその一生を宣教師として、或はアフリカに、或は極東に捧げた動機については知りえないが、恐らく父親並びにその教会牧師の感化ではあるまいか。モンドレル家の属していた教会は、カルストン・ウェリングトン地区のパリシュ・チャー

チであるセント・メリー・ザ・バージン教会（St. Mary the Virgin., Calston-Wellington.）であった。師の父親はその社会的地位にも拘らず、その厚い信仰の故に、選ばれて永年その教会の教会委員長（churchwarden）の職にあった。英国国教会はその牧師と二名の教会委員長によって経営される。当時その教会の牧師は、キャノン・ガスリー師（Rev. Canon Guthrie）であった。同牧師は海外伝道に多大の関心を有していたので、或は説教壇から、或は個人的会話の折に、その光栄ある使命について語ったことであろう。その頃人口に膾炙した言葉に「宣教師となることは天国に於て最高の地位が与えられる」[4]という表現すらあった。さらにガスリー牧師は青年モンドレルを宣教師として適任者であると、自らC・M・S・本部に推挙している。本部において銓衡の結果、これを認め、イズリングトンにあるチャーチ・ミショナリー神学校に受験せしめた。その結果一八五九年度の新学期より入学を許され、満三年に亘る神学教育の終了後、一八六三年三月、カンタベリー大主教ロングレー師父（The Most Rev. C.T. Longley）によって執事職に按手され、翌月ただちに任地マダガスカルへ出立した。当時、同地域の管轄主教は、モーリシャス主教ライアン師父（The Rt. Rev. V. W. Ryan, Bishop of Mauritius）であって、モンドレル師は一八六四年六月、同師父によって司祭職に昇叙された。[5]

次にマダガスカル島におけるプロテスタント伝道史を簡単に述べると、最初の伝道はロンドン伝道協会（London Missionary Society）でなされ。一八一八年、始めて両名の宣教師とその家族を同島に遣ったが、間もなくマダガスカル熱病に冒され、宣教師とその家族は全滅した。マダガスカル国王ラマダ（King Ramada）はキリスト教を歓迎したので、その要請により同伝道協会は、さらに宣教師、学校教師、技術者を含んだ一団の宣教団を派遣した。彼らは児童教育、住民の産業技術指導に当り、間もなく首都とその附近に一〇〇の学校とこれに在籍する五、〇〇〇名の児童を得た。また首都にキリスト教会も建設した。一八二八年、ラダマ王の逝去により、残忍な王位継承争いの後、王妃の一人が即位しラナバロナ第一世を呼称した。ラナバロナ女王はキリスト教をにくみ、在位三三年間の二五年はキリスト者を迫害し、多くの殉教者を出した。一八三七年、女王はさらにロンドン伝道協会の全宣教師に島外退去を命じた。一八六一年女王の逝去により、王子のラマダ第二

世が即位した。新国王は島民に信仰の自由を与えたので、隠れたキリスト者は各地に現れて、一カ月を経ぬ間に一一の教会が首都に形成される状態であった。また各地に殉教者記念会堂が建立された。新国王はさらにロンドン伝道協会に書面を送り、宣教師の派遣方を依頼し、この要請によって新たに六名の宣教団が送られ伝道が再開された。[6]

元来、ロンドン伝道協会はマダガスカルの首都並びに同島の西部と南部に居住するホバス族（the Hovas）の間に伝道をしていたが、東部と北部を占住しているサカラバス族（the Sakalavas）の伝道はなされていなかった。そこでロンドン伝道協会はこのサカラバス族間の伝道開始方をC・M・S・に依頼したので、C・M・S・本部はモーリシャス主教ライアン師父をして、同島の事情調査をなさしめた。同主教は一巻のマダガスカル語聖書を片手に上陸し、堕落した土地の宗教、不道徳な島民の生活を見聞して、主の福音を伝える責任を痛感したのであった。島を去るに臨んで国王に拝謁し、国内に伝道する許可を求めた。国王の許可をえたので、この旨を英本国に伝え、宣教師の派遣方をC・M・S・並びにS・P・G・（Society for the Propagation of the Gospel）の二大伝道協会に依頼した。C・M・S本部はこの依頼を容れ、チャーチ・ミショナリー神学校在学中の学生を選考し、トマス・キャンベル（Thomas Cambell）とハーバート・モンドレルの両名を要員として待機させた。この指名を受けたモンドレルは、その喜びを郷里の両親に次のように伝えている。「マダガスカルは主に奉仕するための輝ける天地であります。十字架の先駆者としての私は、祈りと黙想のうちにその光栄を静かに考えています。どうか御両親の祈禱の折に、私が主によって正しく導かれますように、キリストの御名によって祈って下さい」[7]と彼は謙虚に祈禱によって支えられるように願うている。

モンドレルは一八七三年早春、神学校を了え、学友キンベルと連れ立ってランベス宮殿に赴き、執事試験を受け、同年三月一日カンタベリー大主教により執事職に按手された。翌月ロンドンを出立してモーリシャス島に向った。モーリシャス島はマダガスカル島の東方五〇〇哩、印度洋上の島嶼で、この島を中心としたモーリシャス群島がある。この群島と北方のセーシエル群島はともに英領である。一八五四年この両群島でモーリシャス教区が組織され、ライアン師が初代主教に補せら

れたのであった。この主教の下にホッブス師（Ven. Stephen Hobbs）がアーチデアコノとして補佐し、さらにその下でC・M・S・、S・P・G・に属する数名ずつの宣教師が伝道に従事していた。モンドレル師はホッブス師の下にあって一カ年、マダガスカル語の勉学をしたが、その進境は目ざましく、半年後にはマダガスカル語で教会の礼拝を司ったということである。翌六四年六月一一日、ライアン主教によって司祭職に昇叙され、その夏、待望のマダガスカル島に出発した。この航海の途次、印度洋上の暴風に出会い辛苦の後、漸く東北岸のボヘマル（Vohemar）に到着した。ここが師の最初の任地であった。この地方は風光明媚で、物産も豊富な地方で、生活の容易な地方であった。例えば鶏一羽が四ペンス、牛肉一ポンドが一ペニィという程度である。ボヘマル地方の長官はキリスト者であったので、将来この地方に教会堂、学校その他の施設を建て得る希望が与えられた。一八六六年、アンデボラント（Andevoranto）に居を転じ、そこに宣教師館を建て、教会兼学校の建物も新築し、毎日曜の礼拝には少数ながら会衆があった。師は特に青年の教育に意を注いだが、これが将来の日本伝道に大いに役立ったのである。一八六七年冬、小暇をえてモーリシヤス島に渡り、翌年、エリザ・ホッブス嬢と結婚した。ホッブス嬢はアーチデアコノ・ホッブス師の息女である。一八七一年、マダガスカル島よりモーリシヤス島に転任を命ぜられたが、師は常にマダガスカル帰任を望んでいた。当時、モーリシヤス島は熱病の大流行があって、モンドレル夫人もひどく冒され大変な衰弱であった。依って主教の許可をえて一八七三年八月、休養のため英国へ向けて出立した。これは一〇年振りの帰国である。英国ではダウンシャイヤー・ヒルの聖ヨハネ教会に勤務し、夫人の病状の回復を待った。この滞英中にマダガスカル伝道に変革が生じ、引いては同師の生涯の一大転機となった。由来マダガスカル伝道は多くの伝道団体によってなされていた。ロマ・カトリック、ロンドン伝道協会、ルーテル、ノールウェーの教会、さらに英国教会のC・M・S・とS・P・G・によって伝道され、その伝道戦線は複雑に入り混んでいたので整理と統一が要求されていた。さらに英国国会の政治的圧力が海外伝道に加ったので、これを嫌ったC・M・S・は手を引き、同島の伝道をS・P・G・に委ねたのである。[8] その結果、本部はキャンベル師をモーリシヤ教区へ、モンドレル師とデニング師（Rev. W. Dening, 一八七〇年マダガスカル島

へ派遣）の両名は日本伝道のために配置転換がなされた。

一八七五年五月六日、モンドレル師とその家族は、日本へ向けて英国を出立した。出立に先き立って、C・M・S・本部は次の訣別の辞を送っている。「モンドレル兄弟よ、我ら本部は卿ならびに卿の夫人に、心よりの同情の言葉を述べざるをえない。卿らは一〇年に亘る伝道の結果、主の御名に加えた多くのマダガスカル信徒と決別し、且つ熟練せるマダガスカル語を捨てて新任地に向うとは、断腸の思いと推察申し上げる。……ひるがえって長崎の土地を展望すると、長崎はその伝統的な頑迷と偏見のゆえに、過去の先輩諸師を苦しめたが、卿らも同様に苦悩せざるをえないと思う。しかし長崎は日本における我らの最初の伝道基地であり、且つ九州男子は最も勇敢な武士と聞いている。願くはその地に始められた宣教の御業が日本全土に及び、御名の故に人々を集め給う主が、時いたりて刈り取られんことを。」[9]

本部の声に励まされ、英国を出立した夫妻は七月上旬に長崎の土を踏んだのである。これは日本における英国系の最初の教会、則ち長崎の出島教会の献堂式の数日前のことであった。[10] 出島教会の建立は、前任者エンソー・バーンサイド両師の念願で、日本人信徒のために長崎市街地に土地を求め、そこに教会堂を建立する願いであった。併しながら長崎の人々は無智な群衆の暴挙を恐れて、借家は勿論のこと、土地の提供者も皆無であった。依って両師は外人居留地に土地を求めたところ、幸にして出島新橋口の出島八番（一〇三坪）、出島九番（一〇九坪）の土地を入手した。[11] エンソー師が病気のため帰英後は、専らバーンサイド師がその衝に当り、教会堂建築資材はこれを英国に求め、その材質は樫、けやきの美麗な堅材で、この資材は全部、英国で切り込んで船来したのであった。[12] 翌九年、始めて来邦した日本管理主教、香港のバードン師父は、長崎湾で出島教会を遠望し、次の感想を記している。「塔の上に十字架をかかげた教会堂は、美しい長崎湾の奥にあって目立つ建築物である。御承知の如く出島は、非キリシタン信仰を立証するために、踏絵の十字架を土足にかけた場所である。今ここに十字架を掲げるのは、他の如何なる場所に掲げるよりも意義深いことである。」[13] この出島教会堂は、明治二三年、そのまま大村町に移築され、長崎聖三一教会として長く信仰の証しをしたが、長崎原爆と共にこの教会堂も潰滅した。不思議な運命

をたどったものである。引き続き別項として同師の九州における伝道生涯を記したいのだがこれを割愛した。御諒承をえたい。

〈注〉

(1) Church Missonary Socity : Register of Missionaries and Native Clergy. 1904, Printed for Private Circulation.
(2) E. Headland : Brief Sketches of C.M.S. Workers, London, 1897.
(3) Proceedings of the General Conference of Protestant Missionaries in Japan. Tokyo, 1901.
(4) E. Headland, Op. Cit. p. 52.
(5) ロンドン伝道協会は一七九五年に組織され、組合派、英国国教派、長老派、メソヂスト派の協力によるもので異教の地にキリスト教を伝道するのが目的であった。同協会は一七九六年、最初の宣教師達をタヒチ島へ送った。この場合の原則であり、特色は、各宣教師が正しいと思う教会制度を採用してよいことであった。最近における伝道地は、支那、印度、東南アジア、東南アフリカ、南洋で、いまは主として組合派の宣教師によって伝道されている。
(6) The Encyclopedia of Missions. pp. 419～425
(7) Headland, Op. Cit., p. 53.
(8) 一八七二年、マダガスカル教区を新設し、S・P・G・、C・M・S・の共同推挙によるローリィ司祭を主教聖別の運びとなった。カンタベリー大主教は、時の外相グランビル伯に、海外駐在の主教聖別のためエリサベツ女王よりその勅許を得るように依頼した。この依頼を外相は拒否している。これは非国教派議員の働きかけであった。その前にマダガスカル王室の信頼をえているロンドン伝道協会の宣教師たちは、主教聖別の折に、英国女王の勅許をえた者が来島することは、王室を始め島民に、主教は英国女王より直接派遣された者と誤解され、同派の宣教師の信用失墜を恐れて、国会議員を通じて反対したと言われている。そして外相は大主教にスコットランド監督教会より主教を送ることを提案し、ケステル・コーニシュ司祭がスコットランド諸主教によって聖別され、一八七四年によって赴任した。政府当局による外国伝道の介入を嫌ったC・M・S・は、モンドレル、キャンベル、デニングの三宣教師を引き上げたのである。(History of Church Missionary Society. vol. II pp. 479～480.)
(9) E. Headland, Op. Cit. p. 78.
(10) C. D. Snell : Japan and Japan Mission. 4th edition, 1950, p.85.
(11) 一九六八年九月一〇日附、C・M・S本部古文書主任ミス・キーンの書簡による。

(12) 出島教会のこの記事は、長崎聖三一教会元牧師、松岡安立司祭の談である。

(13) C. D. Snell: Japan and Japan Mission, p. 85.

2

モンドレル師は日本語を解するに及んで、先ず長崎とその近隣の土地に於て、路傍伝道を開始した。この路傍伝道に際しては常に水科五郎[1]が師を助けた。師はマダガスカル島の伝道経験から、日本伝道の将来を見通して、神学校の設立を意図されたのであった。明治九年、香港ビクトリヤ主教バードン師父の長崎巡錫があって、同年聖霊降臨日に八名の信徒が堅信式を領したが、その裡の三名を特に選んで、将来、神学校開校の場合は、最初の神学生として入学させる目的で、聖書教育を始めた。同師はその書簡に記して「三名に対しては既に一年有半、後者の一名については約一年、連日、特別な聖書とキリスト教教育を施した。彼らはいづれも自費、或は極く僅かな援助をえて、宣教師館の近隣に居住している。」[2]他の史料によると、犬塚義信も間もなく参加したようである。洪恒太郎の記録によると「明治一〇年一月、右両氏（吉富、諸岡）と犬塚義信氏の三氏に伴われて出崎し、三氏の研究会に加わり、毎日聖書の講義をきき、またミセス・グードォル女史より英語の教授を受けたり。この研究生には右諸氏の外に木庭孫彦氏もありたり。」[3]筆者はここに記されている「連日」、「毎日」の講義を特に留意し、この研究会こそ長崎聖アンデレ神学校の濫觴と考えるものである。C・M・S・本部は、モンドレル師の邦人伝道者養成の抱負と、既に神学校開始の準備としての研究会のある事実を知り、神学校開校の許可と校舎新築の資金が送達されてきた。明治一〇年九月、長崎神学校は開校され、四名の神学生が誕生することになった。この本部からの建築資金によって、東山手九番、則ちモンドレル師の敷地内に工事が始められ、同年一一月三〇日、聖徒アンデレ日に校舎の落成式が挙行された。モンドレル師の書簡を引用すると「伝道師、按手を領した牧師、或は学校教師の養成を目的とした神学教育のため、新築中の建物は、去る聖アンデレ日に落成しました。ここに入寮を許可された青年は、熊本のステパノ木庭、佐賀のパウロ吉富、同じくパウロ諸岡の三名であります。他の一名の青年、ヨハネ洪は、その妻と両親が、彼の志望に同情と賛成をよせま

せんので、目下寮外に居住しています。小職はこの手紙を神学校の教室で書いています、神学生らは水科伝道者と私の前で受験中です。これは本校の最初の試験です。本日の試験課目は旧約聖書に関するもので、創世記と出エジプト記であります。午後は新約聖書で、マタイ伝福音書であります。明日は旧新約歴史に関するものと英語であります。英語はわが英国の諸学校で教える古典に該当するものとして学習せしめています。この英語は将来学生達が神学書、教会歴史を研究するに当って、欠くべからざる知識となりましょう。神学生達は小生の許に来るまでに、かなりの日本教育を受けています。小職はこの小さな神学校を開きえたことを神に感謝しています。これは小さな始めであり、試みでありますが、神の祝福により大いなるものに成長するであろうことを信じます。この神学校で敬虔を学び、訓練を受けた主の働き人が引き続き輩出し、その生涯と働きと死を通して、奉仕の実を示し得るように、本部の礼拝時に於て、その祈禱に加えられんことを切望します。」[4]

これが長崎神学校開校当初の描写であり、師の同校の将来に対する抱負でもある。さらに神学生心得ともいうべき六カ条が報告されている。聖アンデレ日に入寮した神学生はこれを朗読して宣誓している。この日、神学生らはモンドレル師、グードォル女史、水科氏並びに参列した外人信徒の前で宣誓したのであるが、その神学生心得六カ条は次の如きものである。

① キリスト教会の働き人として、主を知らざる人々に伝道する真実な願いを有します。
② 本校在学中はその諸規則を守ります。
③ 本校在学中は学問の研究は勿論、神の言を学び、祈禱の人となり、敬虔の心を涵養します。
④ 政党、政派、反政府団体等いかなる政治団体にも関与いたしません。
⑤ 宣教師指導の下に或る期間は実地伝道に従事し、キリストの働き人としての道を学びます。
⑥ 本校卒業後は、宣教師の管理指導の下に、聖職、伝道師、学校教師として、主の教会のために奉仕いたします。[5]

この心得六カ条を見ると、第一条から第三条は当然なことであるが、第四条に政党及び反政府団体と関係を有することの禁止は、当時の世情の投影を思わしめる。これは明治七年の佐賀の乱、明治九年の熊本神風連の乱、続いて一〇年の西南戦

争の直後の時世であり、殊に四名の神学生は、その三名が佐賀出身で、一名が熊本出身であれば、師は配慮せずにはおられなかったであろう。第五条に或る期間の実地伝道に従事することを定めているが、これが長崎神学校から一名の卒業生も出なかった一つの理由であろう。則ち神学生が実地伝道に出ている場合は講義が休講となってその進度がおくれる。或は数年に亘る実地伝道に勤務するため復校の機会を失う場合もあったであろう。第六条は養成目的の中に学校教師を加えている。これはこん後設立されるミッション・スクールの教師を対象としたものであろう。且つまた世界のC・M・S・の諸伝道地に於て、学校教師として勤務した宣教師が念頭にあったことであろう。師の出身校のチャーチ・ミショナリー神学校に近接して、ハイベリー師範学校があった。ここの数多くの卒業生は、学校教師としての召命感のもとにインド・アフリカにおいて伝道に従事した。さらに同師のマダガスカル伝道時代の主教、ライアン師父は同師範学校長であり、また中国第二代主教、アルフォード師父も同校の校長であった。[6] 恐らくこれらの事由で学校教師の養成もその目的に加えられ、洪恒太郎の入学となった。洪夫妻はその初期においては長崎女学校の舎監として短期間、学校に勤務したが、その後は一貫して伝道師、牧師として奉仕した。その後同神学校への入学生は、いづれも伝道師、牧師の志願者であったのである。

神学校々舎の落成の数日後に、英国支那艦隊司令官ライダー提督（Admiral Ryder）の訪問があった。これは同提督が支那艦隊司令官を辞任するに先だって、その艦隊を率いて長崎に寄港したのであった。同提督は長崎神学校校舎の落成を大いに喜び、教室、寄宿舎をつぶさに視察し、種々の助言を与え、将来、寄宿舎増築の場合の資金として五〇ドルを寄贈し、また同行の士官らも一五〇ドルを醵出して辞去した。[7] なお開校の翌一一年は、その神学教育は順調に実施された。開講課目は旧約、新約、教理、教会史、信経、初歩ギリシア語、数学、英語で、ただ一人の教授であるモンドレル師は、神学関係の課目を全部にわたって講義をし、英語のみがグードォル女史の担任であった。その講義の進度は、明治一二年の春までには、旧約聖書は捕囚時代まで、新約聖書はガラテヤ書までであったということである。[8]

明治一一年末、W・アンデレス師（Rev. Walter Andrews, 後の北海道主教）の来崎によって、モンドレル師は長崎英国

教会の負担が軽減された。モンドレル師は、九州各地の開拓伝道に多忙であり、神学生も伝道者として各地に定住した。そのために明治一二年の神学校の開講は甚だ不規則ならざるをえなかった。木庭孫彦は一二年三月より鹿児島に定住、吉富祇貞は一二年後半より佐賀に定住、洪恒太郎夫妻は舎監として長崎女学校に住込み、諸岡、犬塚はモンドレル師の巡回伝道に随行していた。その頃の長崎神学校は上級と下級の二クラス編成で、上級は実地伝道で他出中の折、下級は長崎にあって主日は出島教会の日曜学校を助け、週日は出島の英和学校で、或は授業を教え、或は宗教講話をなして良き働きをなしたのであった。長崎神学校に入学した学生の氏名は詳かにしないが、その最盛時は二五名の学生があったと言われている。なお史料に現われている神学生の氏名は次の如くである。校舎落成時に在学した学生は、木庭孫彦、洪恒太郎、吉富祇貞、諸岡忠一の四名で間もなく犬塚義信が加わっている。その後、渡辺保治、中村亀三郎、市川佐太郎、井上栄熊、江副安太郎、飯牟礼正次、本田清次、野崎春彦、藤友応介、副島義三、田村補三郎、河野岩熊、生熊乙吉、犬塚某（義信の弟）、内田某、夏目某、金子某、らが入学したと伝えられている。[9] 前述の如く長崎神学校は一回の卒業式もなく、一名の卒業生もなかったが、大阪に合併された結果、長崎神学校第一回入学生が、大阪聖三一神学校第一期卒業生となった。大阪聖三一神学校が明治一七年九月開校に伴って、長崎神学校の学生は順次大阪に送られ、明治一九年長崎神学校は遂に閉校となったのである。大阪聖三一神学校の入学、卒業の学生と長崎神学校との関係を記すと次の如くである。明治一七年、大阪聖三一神学校第一回入学生七名の中、飯牟礼正次、本田清次の両名は長崎神学校出身である。明治一八年、第二回入学生三名の中、熊本の牛島総太郎（長崎神学校を経ず直接入学か）の一名は長崎の関係者であり、第三回入学生一四名中、長崎神学校出身者又は関係者は副島儀三、生熊乙吉、黒木州尋の三名、第四回入学者は七名で、そのうち木庭孫彦、洪恒太郎の両名が長崎校出身である。大阪聖三一神学校は明治二二年、その第一期卒業生を出しており、卒業生六名中、木庭、洪、飯牟礼の三名が長崎神学校出身である。初め大阪聖三一神学校の修業年限は五年であったが、木庭、洪の両名は長崎神学校に三年間在学、加えて四、五年に亘る実地伝道の経験が認められ、第四学年に編入学の上、二カ年間の在学で卒業したのであった。[10] 同二三年、第二回卒業生を

出したが、卒業生二名でいずれも長崎神学校出身又は関係のある本田清次、牛島総太郎であった。第三回卒業式は明治二五年で（明治二四年は卒業式なし）三名の卒業の裡、副島儀三が長崎神学校出身である。これを見ると大阪聖三一神学校の極初期の卒業生一一名中、長崎神学校出身並びに関係者が七名で、残りの二名が大阪及び函館のC・M・S・所属で、その他の二名は米ミッション所属であった。[11] これらの七名はいづれも親しくモンドレル師の薫陶を受けた人物で、特に木庭孫彦は卒業後ただちに大阪の母校の講師に挙げられ、生涯その教授の職にあって日本聖公会の幾多の聖職、伝道師を育成した。洪恒太郎はその生涯を郷里九州で伝道し、エビントン・リー両主教を補佐して九州教区の重鎮であった。これを想うときに、モンドレル師が創設した微々たる神学校が、日本聖公会に及ぼした大いなる影響を驚嘆せずにはおられない。

日本におけるC・M・S・初期伝道時代の諸宣教師中、神学教育に関する研究はモンドレル師の独壇場であったことは次の事実で知ることができる。明治一一年五月、東京において第一回C・M・S・宣教師会議が開催された。これと前後して在日三ミッション、則ちC・M・S・、S・P・G・、米ミッションの合同宣教師会議が開催され、日本人用の聖公会禱文の出版、同一祈禱書の使用等の重要決議がなされたが、この時のC・M・S・の単独宣教師会議では、研修会が併行して開催され、各宣教師はその得意とする題目について研究発表が行なわれた。ワレン師の「宣教師の活動方法」、デニング師の「説教」、エビントン師の「教育事業」、J・ウィリアムズ師の「文書伝道」、ファイソン師の「在日キリスト教文献」等であったが、モンドレル師の研究は「邦人伝道者の選択とその教育」と題するものであった。その研究の要旨は「選択はC・M・S・の大原則に依らねばならない。則ち霊的な働きは霊的な人物に依るという原則で伝道者を選択せねばならぬ。そしてその教育内容は日本の仏教、神道、さらにロマ・カトリック宣教師の教え、或はヨーロッパの懐疑主義に対応のできる充分に教育された伝道者養成を目的とせねばならない。教育を施す場所としては、第一段階においては、各宣教師がその伝道基地（each station）において塾的教育するのである。第二段階においては各地の塾的神学教育機関を統合して、C・M・S・中央神学校としての機関に発展させ、第三段階においては米派、S・P・G・、C・M・S・の各ミッションの神学校が大同団結して全国一カ所に中央大神

学校を設立する」というのである。師の意見に対しては、集った宣教師の全員が「しばらくは各宣教師が各自に邦人伝道者を養成し、将来はC・M・S・中央神学校で教育する」[12]という結論に賛意を表したのであった。師の意見は全く予言的であって、プール主教の来任とともに合同した大阪聖三一神学校が設立され、さらに一九〇八年のパン・アングリカン・コングレスの感謝献金によって、米派の東京聖三一神学校、S・P・G・の聖教社神学校、C・M・S・の大阪聖三一神学校の三者が合併して、名実ともに伴う聖公会神学院（Central Theological College）に発展したのであった。師は日本聖公会の神学教育に関しては、実に卓見、具眼の士であったと言うべきである。

〈注〉

(1) 水科五郎は明治五年ハリストス正教会においてニコライ師より受洗後、バーンサイド師の下に来る。二川一騰の出獄後、二川と共にバーンサイド師より将来の伝道者としての教育を受ける。二川がデニング師に伴われ函館へ赴任後、水科はバーンサイド師の伝道を助け、次いでモンドレル師の伝道者として同師を助けた。彼は勇敢な伝道者であった。後に北海道に転属し、明治二十五年三月釧路郊外の鳥取村において雪中に遭難して殉職す。

(2) モンドレル師書簡、一八七七年一二月二三日附（C・M・S・本部所蔵）

(3) 洪純一編「その俤」五七頁。

(4) モンドレル師書簡、一八七七年一二月二三日附（C・M・S・本部所蔵）

(5) モンドレル師書簡一八七七年一二月三一日附（C・M・S・本部所蔵）

(6) History of the Church Missionary Society. vol. II p.356.

(7) モンドレル師書簡、一八七七年一二月三一日附（C・M・S・本部所蔵）

(8) 同師書簡、一八八〇年一月五日附。（C・M・S・本部）

(9) 洪純一編「その俤」五九頁　三浦清一著「九州に於ける聖公会」七二頁

(10) 大阪聖三一神学校々友会報第三号明治三七年一二月刊

(11) 大阪三一神学校統計明治三〇年刊

(12) The Church Missionary Intelligencer. 1878, pp. 576～578

3

モンドレル師の女子教育は、婦人宣教師ミセス・エリザ・グードォル女史（Mrs. Eliza Goodall）の補佐と協力によってなされた[1]。同女史は英国名門の出身で、桂冠詩人テニソン卿の従妹に当り、夫君は永く印度駐屯部隊のチャプレンとして、印度に在住した。夫君の死後、明治九年、女史自ら志願して来邦し、長崎の外人居留地に居住し、生涯、無給の名誉宣教師としてモンドレル師を助けた。同女史の来邦は五八歳の時であって、老齢に及んでからの伝道生活なので、その健康を疑懼されたが、そのたゆまない宣教の熱心さに、当時、来朝したC・M・S・総主事ウィグラム氏をして「驚くべき老婦人」と感嘆せしめた程であった。始め女史は印度時代からの関連によるものか Church of England Zenana Missionary Society 略してゼナナ・ミッションと称さるる伝道協会に、名誉宣教師として登録した。このミッションはゼナナ則ちヒンズー語の婦人の居室を意味するように、その目的は婦人宣教師を印度婦人の間に送り、印度婦人の地位の向上、印度の女子教育の振興、病院を建設する等の働きであった。常に他の伝道団体と協力して活動するのであって、印度においては特にC・M・S・、英国聖書協会との協力が著しかった。中国に渡っては、C・M・S・と提携して香港、福建において活動した[2]。その婦人宣教師の多くはC・M・S・宣教師の配下にあって女子教育と婦人伝道を担当したのであった。しかしグードォル女史は間もなくC・M・S・の名誉婦人宣教師として登録されているので、日本におけるC・M・S・の初代婦人宣教師として永く記憶にとどむべきである。しかるにグードォル女史は全ての人から、否その墓のある長崎に於てすら、全く忘れさられた。残念なことである。序ながらここにC・M・S・日本伝道の初期の婦人宣教師の氏名を列記して記憶したい。最初はグードォル女史で、第二に来朝したのは明治一〇年、大阪に着任したオックスラッド女史（Miss Mary Jane Oxlad）で、プール女学院の前身である永生女学校を創設した。その後、札幌にも伝道して数年を経て帰国している。その第三はカスパリ女史（Miss Jane Caspari）で、始め西アフリカに伝道し、明治一三年、個人の資格で宣教師デニングの家庭教師として函館に来住、その後再びC・M・

S・婦人宣教師として大阪に伝道し、大阪聖三一神学校の英語教師も兼ねた。明治二一年一二月一八日神戸において逝去す。享年五〇歳。その第四はボールトン女史（Miss Emily Bishop Boulton）である。英国の女子教育振興協会より女子教育のために派遣され、明治一六年来朝、オックスラッド女史に次いで永生女学校を経営し、プール女学校の設立とともに同校の教師となり或は校長として勤務し、その後は大阪の婦人伝道女学校長として貢献した。その第五はブランドラム女史（Miss Mary Elizabeth Brandram）で、明治十七年、婦人宣教師としてその兄J・B・ブランドラム師と共に来邦、長崎、熊本に伝道して、兄の結婚により明治二三年帰英した。第六は三名の婦人が同時に来朝す。トリストラム、タプソン、スミスの三女史で明治二一年の来朝である。トリストラム女史[3]（Miss Katharine Alice Salvin Tristram）は新設のプール女学校の校長として来日し、タプソン女史は（Miss Anna Maria Tapson）はプール女学院の教師として赴任したが、間もなく健康を害して、北海道に転じ、スミス女史（Miss Mary Gertrud Smith）は熊本に伝道して、後にブランドラム師と結婚す。これに引きつづいて婦人宣教師が続々と来朝する。

再びグードォル女史に戻ることとする。女史の最初の働きは、長崎神学校において英語を教授することであったが、次いで明治一一年、その念願であった女学校の設立が本部において決定され、同年一〇月、モンドレル師のもとに「日本伝道基金より長崎市に女学校（寄宿舎附）設立のために給附金を支出する」旨の通知があった。[4] この給附金によって長崎市東山手居留地三番の建物が購入された。これは以前に長崎時代のフルベッキ師の住宅であった。この東山手三番と称さるる場所は東山手居留地の中央に位して、英国人教会堂の背後にあって、「最も便利な場所に位置」していると記されている。明治一二年、女史はこの女子塾（英語は Girl's Training Institution 又は Girl's Training Home と呼ぶ）後年の長崎女学校で、当初二名の塾生と起臥を共にして彼らを薫陶した。明治一三年、さらに女子一名が入塾する。彼女は佐賀の受洗者で後に伝道者諸岡忠一の妻となる。女史の塾生教育は至れり尽せりと言うべきもので、エビントン主教が女史を追悼した辞に「塾生が婚期に達すると、嫁入道具を仕度くして結婚せしめ、新生活に入らしめた。彼らの多くは日本人伝道者と結婚し、良き

妻、力強い配偶者として神の栄光を顕した」と述べている。[5] さらに次の一節はこの女子塾の片鱗を語っていると思う。「洪寿賀子夫人は、東山手に居留せる英国士官の妻にして、主人永眠後伝道のため献身来朝せしミセス・グードォル女史に就き英語、オーガンを習い、欧米の文化を修得せられたり、かくて葉隠論語により武士道を体得せる夫婦は、さらにキリスト教により聖別せられて新しき家庭を形成せられた。」[6] 明治一二年は女子塾における訓育、指導のほかに、同年春開校された出島英和学校において、或は長崎神学校において連日英語を教授する多忙な生活であったが、老齢よくこれに耐えて活躍された。日本聖公会要覧によると明治二五年度には、長崎女学校と呼ばれており、ハーベイ女史（Mrs. Jane Harvey）が教師として補佐している。ハーベイ女史も同じくC・M・S・の名誉婦人宣教師で、グードォル女史の後継者であった。明治三五年にはグリフィン女史（Miss Annie Griffin）が来任し、次いで校長の職をとり、明治三九年、大阪プール女学校との合併時までその職にあった。要覧によると明治二五年以降、その生徒数は殆ど一〇名で、多い時に一一名、少い時で九名という数で、これが明治三八年まで続ている。長崎女学校が俗に一〇人学校と称された所以はここにあるのであろう。晩年に来朝したグードォル女史は、その残る全生涯を女子教育に捧げ、明治二六年三月二一日、七五歳の天寿を完うして長崎において就眠し、長崎の土地に葬られたのであった。筆者はその墓地の所在は誰に質ねても解らない。今夏、長崎に旅した折に長崎図書館を尋ね、外人墓地台帳の貸与を受けて調べた結果、浦上旧外人墓地の墓地々割簿のうちにグードォル女史の墓所を突き止めた。それは次の如き記載である。「区別は上等、地割番地は一二三番、面積は三五英平方尺、金額は一七・五〇とあり、死者氏名はエリザ・グードォル女とあった。埋葬年月日は明治二六年三月二三日であって、願人氏名はエー・アール・フーラー」とあった。フーラーとはモンドレル師が帰英後の長崎伝道の責任者フーラー司祭である。筆者は天野牧師の案内により、浦上旧墓地を調べた結果、漸く探し当てた。墓碑の形状は扁平で等身大の高さであり、上部にはアイリシュ・クロスを戴いている。原爆のためかこのクロスは三つに割れて地上に転んでいた。グードォル女史は夫君の死後、五八歳にして長崎に渡り、六一歳の晩年に及んで新しく教育事業に専念し、数少い塾生の中から、多くの伝道者の内助者を送ったこ

とは驚くべきことである。当時の主教ビカステス師父は彼女の生涯を追憶して「己が生涯とその才能を神に捧げた人々のうちで、彼女ほど、多くの実を結んだ婦人を、他に発見できると考えるのは誠に困難なことである」と述べている。

先に記した如くモンドレル師の来邦は明治八年で、当時の日本社会は江戸封建時代の風習を受けた男尊女卑の世相で、「女はすべて文盲なるをよしとす」という時代であった。かかる低調な女子の地位に清新ないぶきを吹きこんだのはキリスト教宣教師で、モンドレル師も女子教育の重要性を感じ、名門の出身であるグードォル女史に乞うて来崎を求め、その女子教育を托したのであった。女史は西洋の教育理念によって新しい教育を施行し、模範的クリスチャン・ホームの実践を、共同生活を通じて塾生に体得せしめ、古い日本の家族制度に新しい光明を投じたのであった。これはとりも直さずモンドレル師の女子教育に対する理念であり、実践であったのである。

次にモンドレル師は当時、小学校設立の少い時代に、不完全ながら小学校教育を実施した先覚者であった。これが出島新橋口の英和学校である。或は出島学校とも呼ばれ、C・M・S・本部には Deshima Day-School の名称で報告されている。この英和学校の所在地は出島一一番で、出島日本人教会に隣接して建築された。明治一一年の晩秋に落成し、二階建の校舎で、八一三坪一二平方米[7]という当時に於ては堂々たる小学校であった。この建築に要した費用は、その大部分は長崎居住の英国人その他の外人の寄附金によったもので、その醵金額は九〇〇ドル英貨にして一八〇ポンドと記されている。この建物は落成後の数カ月は、出島日本人教会の日曜学校教室、聖書研究会の部屋に使用されていた。かくして明治一二年二月三日に開校されたのであるが、その開校披露と入学生徒募集の広告が、明治一二年一月二四日附、西海新聞に掲載されている。それによると、

出島新橋口新築学校来ル二月三日ヨリ開校、左ノ学科教授候間男女ニ不拘有志之少年諸君御来学有之度候

教則　一、普通日本小学科自午前八時至十二時　二、普通英学　三、縫裁洋服自午後二時至四時

右之通相定候間、規則其外委細之儀御承知相成度御方ハ、大浦東山手九番モンドレル氏並にグードール氏ニ就キ御問合有

之度候也[8]

明治十二年二月モンドレル師は英和学校の責任者であったことは勿論であるが、出島新橋口英和学校校長として教師を兼ねたのはグードォル女史で、他に邦人教師が一名あった。長崎神学校の学生たちがここを手伝い、就中、童話の上手な神学生、渡辺保治（後に執事で就眠）は、殊に児童の間に人気があった。毎日の授業は午前は小学校の課程で邦人教師が担当し、午後はグードォル女史が英語、洋裁を青年男女に教授した。同女史の毎日は実に多忙であったと言わざるをえない。午前は神学校にあって学生に英語を教授し、午後は英和学校に出勤し、さらに女子塾においては二四時間、塾の生徒と寝食を共にしたのであった。英和学校は明治一二年度の在籍生徒は二〇名より二五名の間であったが、次第にその数が減じ、遂に明治一六年に閉校することとなった。[9] その後はこの建物は専ら長崎神学校の校舎として使用され、ここで講義が行なわれ、そのチャペルと図書館はここに設置された。併し明治一九年、神学校閉鎖ののちは、宣教師、婦人宣教師の住宅に供され、[10] エビントン主教の師就任後は、神学校チャペルは主教邸チャペルとして日々の礼拝の用に供された。明治四二年、リー主教（Rt. Rev. Arthur Lea）はその主教座を福岡に移すのに伴い、幕末明初以来、長崎における米派とC・M・S・関係の諸施設、諸建築は種々な変遷に遭遇することとなった。日本聖公会の最古の建築は、文久二年、[11] ウィリアムズ師の創建で、のちにC・M・S・宣教師に譲渡された英国人教会堂であるが、これは第一次世界大戦頃に礼拝堂は崩潰し、また出島教会を移築した長崎聖三一教会堂も、第二次世界大戦時に長崎原爆によって灰燼に帰し、その他すべての由緒ある建物は消失した。唯一現存するのは、出島一一番の長崎聖アンデレ神学校の旧校舎である。これも民間の手に渡り、取り毀し寸前にあったのが、長崎市によって重要文化財の価値が見出され、目下永久保存の手続き中である。筆者は寡聞にしてその全貌を知らないが、恐らく聖公会関係の建築物中、重要文化財の指定を受けたもの、又はその手続き中のものは、犬山在の旧京都聖ヨハネ教会堂とモンドレル師の創設による長崎聖アンデレ神学校舎の両者ではあるまいか。在天のモンドレル師の霊もって瞑すべきである。

〈注〉

(1) Church Missionary Society: Register of Missionaries. p. 281.
(2) The Encyclopedia of Missions. pp. 808～809.
(3) C.M.S.: Register of Missionaries. List II, p. 276. ダラム大学卒、C・M・S・婦人宣教師中最初の大学卒献身者。
(4) 明治一一年一〇月二六日附、C・M・S・本部よりモンドレル師宛の書簡
(5) Tokyo Missionary Conference. 1901, p. 702.
(6) 洪純一編「その俤」五九頁
(7) 山口光臣著「長崎の洋風建築」一一八頁
(8) 同右一八〇頁
(9) Snell: Japan and Japan Mission. 1904, p. 86.
(10) Snell, Op. Cit., p. 85.
(11) 永田友諒氏発見の長崎奉行所「外国人名員数書」による。

4

モンドレル師の著作については、最初に記載したC・M・S・宣教師登録簿の履歴中に記されており、また「C・M・S・創立百年記念誌」にも記されている。[1] いづれも同一の記事でマダガスカル語訳の訳書は三冊、日本語訳の書物は二冊となっている。マダガスカル語訳関係のものは第一に"The First Reading Book"の訳本と、第二は祈禱書中の「聖職按手式文」のマダガスカル語訳、第三はすでにマダガスカル語訳ができていた祈禱書中の「臨時諸式文」の改訂訳である。日本語関係の翻訳は"Pinnok: Analysis of Old Testament History"と"Life of our Lord"の二部である。前者は四冊の分冊もので「聖書略史」と題して邦訳され、後者については筆者は寡聞にして未だその日本訳をみていない。諸賢の御教示をうるならば幸である。

モンドレル師の「聖書略史」を特に取り上げたいのは、これは日本聖公会における神学校の教科書で、神学教育のために出版された最古のものであるということである。その序に「此聖書略史は聖書の事実を一々簡略に知るに便ならしめ、神学

校……の用に供るものなり」と記してあることによっても明白である。その後、C・M・S・のチャプマン著「何西亜註解」（二四年）、同じくチャプマン著「教師之職務」（一名牧会学）」（二五年）等々が出版され、その他日本聖公会の米派、S・P・G・の神学校の講義が多く出版されたが、聖書略史は最も早い出版であり、その出版の年月は、明治一五年と一六年に亘っている。次に聖書略史の内容はというと極く簡単な旧約聖書の紹介で、各巻の内容が手短かに記されており、しかもその紙数は二六〇丁という大部な出版物である。明治一五年以前の聖公会関係の出版物は、朝晩禱文附リタニー（明治一一年）に始る祈禱書関係と、使徒公会之歌（明治九年）に始る聖歌集関係で[2]、この他にウィリアムズ主教の信経問答や小冊子程度の各種の問答書がある位で、少しく部厚なものにデニング著、真道総論三巻（一三年）や貫元介訳、基督教確証三巻（一五年）等があるが、到底、聖書略史全四巻には及ばない。この意味においてモンドレル師の訳書、聖書略史は実に出色のものと言わざるをえない。

聖書略史は和装本で四冊に分冊されている[3]。筆者の手元にあるその第一冊は、表紙は地紋入りの黒色で厚表紙、絹糸で綴じている。その題簽は聖書略史その下に創世記と小さく印刷し、裏表紙は中央に大きく聖書略史とあってその両側に線を入れ、右側は耶蘇降生一千八百八十二年、その左側は明治十五年、長崎出島新橋口聖公会神学校と印刷している。その体は縦二二・六センチ、横一四・八センチ、和紙に印刷した活字本で、一丁は二五字詰二四行で、三八丁を半折にしたものである。第二冊の相違点を記すと、表紙は黄色で、その題簽は聖書略史の下に小活字で二行に出埃及、利未記、民数記、申命記と印刷し丁数は四五丁である。第三冊は表紙は紫色で、その題簽は聖書略史の下に小活字で五行に、約書亜記、士師記、路士記（本文は路得記）撒母耳上下、列王記上と記されている。裏表紙の両側はかわって、右側は耶蘇降生一千八百八十三年、左側は明治十六年と神学校名を印刷していることは第一冊と同じである。丁数は八一丁である。第四冊は同じく紫色の表紙年月日は第三冊と同じで、裏表紙の出版であるが、長崎出島新橋口聖公会神学校の一行が全く削除されている。丁数は九七丁である。題簽は聖書略史の下に列王記上下、歴代志上下、以士喇記、尼希米記、以士帖記、詩書、予言者と三行に細字で

印刷されている。この四冊は六六〇項に分けられ、旧約聖書三九巻を六六〇項目中に適宜に配列し、創世記が一二四項目に分けて記されるかと思うと、イザヤ書が僅かに四項目に短縮される等全体としてのバランスが全くない。その神学的立場は極めて保守的で、巻末の「聖書中肝要なる年代」という附録には、人類の始りは紀元前四〇〇四年とか、アダムの死は九百三十才で紀元前三〇七四年であったとか、ノアの死は九百五十才で紀元前一九九八年であるという超保守的立場に立脚している。この中の字句に創世記とあると右側に「さうせいき」と振仮名をして左側に「ぜねしす」と英語発音を附す等と何の理由か判然としないものがある。この他に出埃及記には右に「ゑぢぷとをいづるき」と振仮名をして左には「ゑくそだす」と英語を記し、申命記には「しんめいき」と「でるつろのみ」と両方を記している。また当時に於て訳語が未決定であった理由なのか、「アポクルフア」「セツチユジント」等はそのまま片仮名で記載している。日本聖公会関係、最古の神学校テキストであるので、その一部を抜萃して閲覧に供したいが紙面の関係上これも省略することといたしたい。

〈注〉

(1) The Centenary Volume of the Church Missionary Society, 1902, p. 731.

(2) 古今聖歌集序に「わが日本聖公会において、印刷された最初の栄誉はC・M・S・派遣の宣教師エイチ・エヴィントン師の編集になる「たゝへうた」(明治七年、一八七四年)に帰さなければならない」とあるが、エビントン師は明治七年十月二十二日英国を出立しているので、日本着は同年十二月末となる。筆者はこの現物を確認したことがなく、また七年十二月末に着任して、日本語を解さないエビントン師が「たゝへうた」を刊行したとは考えられない。筆者は「使徒公会之歌」が日本聖公会最初の聖歌集と思考する。

(3) 日本聖公会組織成立五〇年記念大会展覧会出品録八頁の第一〇類、神学教育関係文書に、一八七番、品目、長崎聖アンデレ神学校出版、聖書略史八冊、出品者名、聖公会神学院としてあるが、神学院は焼失したのでこの八冊の意味が不明である。筆者の所蔵するものは旧約が四冊で完結している。